

# 強者の戦略

## 第7回 南

### ～3年生(1)～

こんにちは！地理の南です。相変わらず京大話をしようと思います。前は2年生の話をしましたね。今回は、文学部生の3年生、というか、私の3年生時代について話して行こうと思います。

第6回を読んでいただいた人には分かると思いますが、私の2年生時代は学生にあるまじき怠惰な生活の連続でした。ほとんど授業に行かず、テスト・レポートもあまりなく、4月初めに成績表を取りに行くときも何のテンションも上がりませんでした。語学の単位は見事に4つとも落とし、どの授業の単位が取れたのかの記憶がまったくありません。しかし、あることに気づいて私の顔つきは一変します。K村教授の英書講読の単位が出ていなかったのです！大学になると60点取れば「可」、70点取れば「良」、80点以上で「優」というような評価をもらえます。「単位を落とす」ということは60点未満の評価だったと考えてください。私の英書講読の点数は恐らく50点台だったと思います。微妙に落とされたということを表しています。何で顔つきが変わったかと言うと、遅刻が多かった私はK村教授の勧めで年末にレポートを課されていました。「このままの出席点だと単位認定には届かないからレポートを提出しなさい」と言ってくれたのです。“お一何とありがたいお言葉！”と狂喜乱舞して、年末に面倒くさいながら、ちまちまイギリスの女性参政権運動に関する英文を読んで訳すということをしたのです。で、レポートを提出したにも関わらず単位を落とされたのです！みなさんに言っても分からないかも知れませんが、教授に言われてレポートを提出した場合、“もう恩情で単位は認定されるもの”という暗黙の了解が成り立っているはずなのです。なので、取れたと思っていた単位を落としたことによるショック、そしていらいらによって顔つきが変わりました。そして、“もしやレポートが届いていなかったのでは!?”という一抹の不安を感じ、京都府立大学に連絡を入れ、K村教授と話をすることができました。「せっかく提出してもらったんだけど、誤訳が多く

て単位はあげられなかったわ」とのことでした。一年間ある程度通った単位を落としたということは、もう一年間通い続けなければならないことを意味しています。このときのショックは、みなさんが大学生になったらより深く感じ取れると思います。

いろいろショックな出来事は続きます。成績表を受け取りに行ったときに、L4のO・R君に出会います。1年生のときの中国語の点数が私より低かったO・R君です。このO・R君は無難に2年生のときも単位を取り、語学の単位もすべて揃えていました。そして、私が意気消沈しながら語学の単位は4つとも落としたことを告げると、「**落ちこぼれたな**…」とぼそっと一言発します。いまだに覚えているぐらい、この一言は悔しい一言でした。

4月の中頃になると、配属された専修の飲み会が開かれました。私は、現代文化学系の現代史学・現代日本論専修になりました。望んでいた専修です。社会学などのように人気が高いと、レポートを提出させられてセレクションが行われるようです。話を戻して飲み会の話です。私は正直参加したくありませんでした。基礎ゼミIでK教授に強烈な叱責を受けて以降、一切ゼミにも参加していませんでした。また怒られるのが怖かったのです。でも友人に、これからお世話になる専修の飲み会に来ないなんてありえへんぞ、と凄まれて参加することを決めました。百万遍の交差点の「くれしま」に集合し、3年生から博士課程の学生、教授陣が集まって総勢40人ぐらいの飲み会になっていたと思います。私は存在感を可能な限りなくし、ひっそり2時間ぐらいをやり過ごそうと思っていたのに、大半の3年生が現代史学のK教授・N教授、20世紀学のK倉教授などにビールを注ぎに行きつつ挨拶を行っているシーンが目には飛び込んできました。こういうシーンは社会に出たら一般的なことになりますので、ああそういうもんなんだと思っておいてください。仕方なしに私も友人と連れだって挨拶周りを始めます。でも、私の友人は2年生の間に教授とのパイプを強固なもの

# 強者の戦略

にしている、どの教授に挨拶に行っても「よく勉強しているね」と言われる優等生でした。こんなことなら別な友人と回るんだって後悔しつつ、「南です、よろしくお願いします」と小さな声で回り続けます。そして、あのK教授のところに来たときです。「南です」と言った瞬間ぐらいに、「君が南くんか」と言われます。“やばい！来た！再び説教タイムが始まるのか～(泣)”と思ったら、「基礎ゼミⅠの名簿に名前があるのに、僕は君の顔と名前が分からないんだよね。これからはよろしくね」と暖かい言葉を掛けていただきました。きっと、ありがたいことに1年前のことを忘れていらっしまったようでした。ふー、助かりました。

次はN教授です。N教授に挨拶すると今度は、「南くん、噂は聞いているよ～」とからかわれます。「英書講読を担当している京都府立大学のK村教授が、“南くんは手に負えないので、来年度の英書講読は私以外の教授の授業を取るようになってください”って言われたんだよね」と言ってきました。せっかく英書講読の単位の傷が癒えてきたと思ったら、もう1回傷跡にカレーを刷り込まれるかのように痛々しい気持ちが蘇ります。でも、このとき、再びK村教授の英書講読の単位を取ってやろうと熱い気持ちが湧き上がったことを報告しておきます。

こうして駄目人間の烙印を押された私は、3年生こそは奮起して勉学に励もうと考えました。っていうか、このまま気持ちが薄れていくと卒業することすらままならないと考えました。京都大学には自由の学風になれすぎて、単位を落とすとしても怒られず、卒業できずにだらだらと長めの学生生活を過ごす人がそこそこいます。もしや自分もそうなるのか！と焦ったので生活改善を試みたわけです。まず全学共通授業(一般教養)の英語Ⅱ(2つ)と中国語Ⅱ(2つ)の4つの授業から決めなければなりません。昨年度は単位認定の厳しい授業を進んで取りに行ったら失敗した苦い経験があったので、今回は無難に行こうと思いました。単位認定の簡単な授業に行ったら抽選で落

とされるよりも、可もなく不可もなくの授業に1回目に行ったら受講資格をもらおうと考えました。ところが、行った教室がなぜか大盛況で(きっと同じことを考えた人がいたのでしょうね)、何と抽選になり、さらに落ちてしまったのです。細かく説明すると、1つは思い通りにいったのですが、1つは抽選に落ちたのです。なので、次の日にまた語学の教室に行きます。結構、受講できる語学の教室は減っていましたが、勇気を振り絞って、外国人講師の担当している授業を選びました。みなさんは気を付けてくださいね。外国人講師の中には授業中に英語しか話さない人もいます。単位認定の仕方や、欠席は何回したらいけないのか、などもオール英語です。私は何にも聴き取れなかったので、見ず知らずの横の人に聞いて教えてもらえました。毎回テキストの予習をして行くのですが、解説はオール英語、授業中に英語で発表した生徒は平常点が加算される、そんな授業でした。私は、英語が話せないし、聴き取れないし、みんなの前で手を挙げて発言するほど剛胆でもない、という三重苦にさいなまれ、90分×20回という1年間の授業時間の大半を、窓の外の風景を眺めながら思索にふけるという高尚な時間に充てました。担当講師は“クレンデネン”という名前でした。縁起のいい名前ではないですよ。単位をクレン…(笑)。一応、英語はこのクレンデネンさんの授業、アメリカの歴史を英書で読んでいく授業に決定し、中国語は現代中国文化をテキストで予習して発表していく授業と、内容は忘れましたが幸福先生の授業に決定しました。“幸福先生”って、絶対に単位くれますよね、名前的に(笑)。

1回で3年生のときの話をしようと思いましたが、ちょっと長くなってきたので、次回もこの話の続きを書こうと思います。教職の単位の取り方の話もしたいと思います。ではまた次回に！